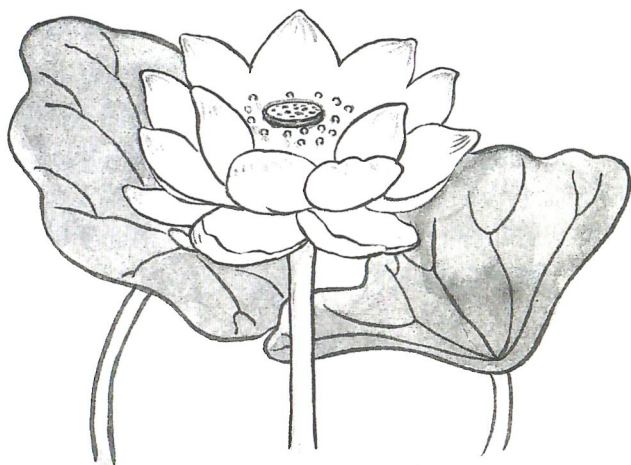


I
Seven Letters of *Odaimoku*
七字のお題目



I

七字のお題目

「南無妙法蓮華經」。これはお題目です。このお題目にはお釈迦様の魂が込められています。日蓮聖人はこのお題目を弘めるためにその生涯を捧げられました。

お題目を唱えるとき、私たちははかり知れない功德を得ることが出来ます。お題目は唱えなければ役に立ちません。他人の莫大な財産の様なものです。自分が所有してなければ、何の役にも立ちません。

宇宙の真理

私たちがお題目を唱えるとき、私たちは宇宙の真理の中に生き、また、生かされています。

「南無」とは「帰命する」ということです。「南無」ということばを唱えるとき、私たちはお題目に命がけでおすすめすると誓っているのです。

「妙法」とは「妙なる法」ということで、私たちが住んでいる大宇宙の尊い真理ということです。地球は太陽の周りを回ります。私たちの寿命は永遠ではありません。これらは厳粛なる宇宙の真理です。

「蓮華」とは、泥池の中にありながらも清らかな花を咲かせる蓮の花です。ですから、「妙法蓮華經」は泥水の中に咲く蓮の花に喩えられるのです。

貴いお題目

「お題目」とはお經の「貴い表題」を意味します。ですから、たとえ私たちがそのことに気付かずとも「南無妙法蓮華經」と唱えると、法華經すべてを唱えていることになります。

「南無妙法蓮華經」は7つの漢字から成ります。中国語訳の法華經は約7万字で構成されています。この7字のお題目を1万遍唱えることは、7万字から成る法華經の全編をいちど読み通した勘定になります。

100万遍のお題目

1980年、私のお寺（大分県 法華寺）では100万遍唱題修行を始めました。はじめは8人が参加しました。

私たちの目標は、8人で合計100万遍のお題目（法華經を100回完読したことに匹敵する）を唱えることでしたが、この目標を達成するにはずいぶん時間がかかると思いました。ところが、なんと1人で100万遍を達成した人が出ました。

8年後には、148人もの方が修行に参加し、皆が唱えたお題目は1億遍にもなりました。現在唱題の合計は1億8千万遍を越え、プロジェクトの名前を変える必要に迫られ、「無量唱題行」としました。このようにして私たちは唱題行を続けています。

支えられてある存在

私たち唱題修行に参加している者は自分の力だけで生きているのではなく、常に生かされて生きていると考えています。私たちが、お題目を唱えることができるのはまさに生かされているからです。そして、お題目を唱えることこそ法華經の実践であります。

諸外国同様、日本各地のお寺では月例の唱題修行の会が開かれています。(唱題)修行に参加することで、私たちは生かされているからこそ、この大宇宙の中に存在しているのだということを理解するのです。お題目を唱えすることから始めましょう。

II To Be Reborn

生まれ変わる



II

生まれ変わる

お題目を唱えることで、私たちは新しい生命を得ます。そして新たな人生を始めるのです。「妙」とは蘇生を意味すると言われます。蘇生とは生き返ることであり、生まれ変わることです。

九州の田舎に78歳のお爺さんが住んでいました。彼の年老いた妻はお題目への信仰が深く、お題目を唱えることが毎日の習慣となっていました。

「必要ない!」

しかし、お爺さんは、「私は生まれて以来悪いことなどしていないのだから、お題目を唱える必要はない」と、日頃から言っていました。それでも年老いてくるとお寺に参るようになりました。

3月のある日のことです。その日は彼岸過ぎだというのに雪が降っていました（日本では、暑さ、寒さも彼岸までと言います）。お爺さんはお寺に来て、私の2歳の娘と遊んでいました。

1時間もたったころでしょうか、娘がよちよちと私のいる部屋へやってきて、「じいちゃん、ねんね」と言うのです。

私は何か不吉な予感がしたて、慌てて本堂へかけつけてみると、お爺さんは横たわり、もうほとんど息をしていませんでした。

「ご臨終です」

私は慌ててお爺さんのかかり付けのお医者さんと、その他2、3人の医師に電話をしました。早速2人の医師が来られました。二人ともお爺さんの瞳孔を診て、脈を取り「ご臨終です」といいました。

偶然その日は15人ほどの信者さんたちがお寺にいました。日蓮宗の総本山身延山久遠寺に参詣する団参旅行のために集まっていたのです。

「何と幸せなのでしょう!」

団参の一員としてその場所にいた奥さんは、「夫はなんと幸せなのでしょう。お寺で、それも日蓮聖人の前で死ぬるなんて、こんなありがたいことはない」と言いました。

誰からともなく、みな自然とお題目を唱え始めました。団扇太鼓を手に取り、太鼓に合わせて大きな声でお題目を唱えました。

およそ15分くらいたったころでしょうか、300遍ほどお題目を唱えたときです、お爺さんが意識を取り戻したのです。お爺さんは病院せず、1カ月ほどお寺に留まり毎日医師の往診を受けました。

その後お爺さんは自宅に帰り、完全に回復しました。後遺症もなく、以来8年の間、毎日お寺に参詣するようになりました。

遠くの声

その出来事から数年経って、私はお爺さんに生き返ったときのことを聞いてみると、「遠くから太鼓の音が聞こえ始め、音の聞こえる方へ近づこうとしていると、意識が戻った」とお爺さんは教えてくれました。

お爺さんの経験はお題目が一度死んだ人を生き返らせることができることを示しています。しかし、より大切なことは（お題目を唱えることで）生きている私たちが生まれ変わって、新たな人生を始められるということです。

III

‘Filial Devotion Is High...’

孝とは高なり



III

孝とは高なり

お題目を唱えるとき、私たちは本人に自覚がなくても、子としての親への義務（孝行）を実践しているのです。「天高けれど考よりは高からず、…地厚けれども考よりも厚からず」と日蓮聖人は示されています。お釈迦様は90日間の瞑想の後、母上である摩耶夫人のために「報恩経」を説いたと伝えられています。

東京の池上本門寺におまつりされている国宝の日蓮聖人像は、聖人のお母様の髪の毛を帯していることで知られています。髪は御像の右の手に握られている^{ほっす}払子の中にまとめられています。

本門寺は日蓮聖人が入滅された場所に建っています。

日蓮聖人が僧侶としての修行を始められるため、11歳の時に現在の千葉県小湊にある清澄寺に入られたとき、お母様から髪の毛をいただかれたと伝えられています。聖人はその髪の毛を生髪を通じて肌身離さず身に付けられていました。

身延山山頂にて

ご両親の恩を報じるため、晩年の日蓮聖人はしばしば身延山山頂へ登られ、ご両親のお墓の方に向かい礼拝されました。両親の恩に報じ、また、孝行を尽くすことは容易にできることではありません。我が身をいとわず孝行を実践した娘さんの話を紹介します。

益枝ちゃん

益枝ちゃんは私のお寺から川を隔てて反対側にある旅館を営む夫婦の16歳になる娘さんでした。

彼女のお父さんは昼間は大分県庁に勤めていましたが、突然事務所で倒れてしまいました。すぐに病院に運ばれましたが意識不明の重体でした。奥さんはすぐに病院にかけつけ、旅館の仕事を放り出してご主人の看病をしました。

ご夫婦には3人の娘さんがいましたが、長女は遠くに嫁に行っています。次女も大学へ通っているため家から遠く離れています。そのようなことで、家にいて旅館の面倒をみられるのはただひとり益枝ちゃんだけでした。可愛らしい彼女はお寺に私を訪ねてきて、「私にできることがあれば何でもしますから、父の命を助けてください」と涙ながらにうったえました。「私は医者ではないので、お父さんを治す

ことは出来ません。でも、病気は治せないが、あなたが一生懸命回復を祈願すれば、お父さんは必ず助かります」と私は答えました。

お百度祈願

翌日から益枝ちゃんはお寺で、毎日お百度祈願のお参りを始めました。学校へ行く前にお寺を訪ね、お題目を唱えながら鬼子母神様の石像の廻りを裸足で100回まわりました。激しい雨が降ろうが、強い風が吹こうとも彼女はこの修行を21日間続けました。彼女の行いは広く学校でも知られるようになり、しばしば友達にひやかされました。21日間のお百度参りは満足な結果を得られないまま終わりました。しかしながら、不思議なことに、彼女が3度目のお百度参りを終えたとき、お父さんの意識が回復したのです。

益枝ちゃんの父親への孝行は立派なものです。しかし、もっと大事なことは、両親の没後に親からいただいた恩に報い供養することです。

IV To Pray for Others

他人のための祈り



IV

他人のための祈り

お題目をお唱えすることで、おのずから現証のご利益^{りやく}をいただくことが出来るのです。

しかし、そのようなご利益も私たちが自分の利益のみを願っているかぎりいただけるものではありません。どれほど一生懸命にお題目を唱えようとも、自分のために唱えているかぎり、自分自身の願いが次々と叶えられることはありません、しかし、他の人のためにお題目を唱えたと、私たちの願いは叶えられます。

ここに紹介するのは、（お題目の功德によって）眼が開いた二人の方のお話です。

それは今から45年前、私が九州大分の本光寺というお寺で小僧をしていたときの話です。当時すでに90歳だった秦野クメというお婆さんが次のような話をしてくれました。

小学校に入学する数か月前、クメさんは突然原因不明の理由で視力を失ってしまったのだそうです。町の眼科に毎日通い続けましたが光がさしません。お父さんの喜作さんは、ふと、身延山第11世日朝上人の書かれたお曼荼羅が菩提寺にあることを思い出しました。日朝上人は眼病を守護で有名です。このお上人（日朝上人）に眼病の平癒を祈願すればその願いは報われると信じられています。

お題目

喜作さんは毎日娘さんを医者に連れ行き、一日の仕事が終わるとお寺へ行き日朝上人のお曼荼羅の前に座り時間のたつのも忘れて夜が更けるまでお題目を唱え続けました。

喜作さんは娘さんの視力の回復を祈願して、3週間の祈りを3回捧げることを決意したのです。もしも、私の願いに日朝上人が応じてくださらないならば、自分の眼をくり抜いて日朝上人へ供養しようとまで考えました。喜作さんは懷にいつも小刀を持ち歩いていました。

不思議なことに、3度目の21日間の唱題祈願が満行した翌朝、娘さんの眼にうっすらと明かりが差し込みました。彼女の眼は小学校に入るまでに完全に治ってしまいました。後年、彼女は女学校を卒業して学校の先生になりました（当時、女学高＝女子高等学校で学ぶ女子は多くありませんでした）。

経文に「六つの清い器官、または感覚（六根清浄）」という句があります。眼、耳、鼻、舌、身、意のことです。それらの器官が清浄になることにより、寿命が延びるのです。そのなかの「眼の功德」は最も有り難い^{くどく}功德です。

2人目は内川文香さんという70歳の方です。彼女はお嫁に行った後、姑さんにお題目の功德を教えられました。内川さんは若いときから眼が悪く、年とともに殆ど見えなく

なってしまいました。病院に通っても原因不明です。

覚林坊

内川さんは姑さんのすすめで、日朝上人がまつられている身延山東谷の覚林坊を訪ねました。彼女は遠く九州から5度もお参りしたのです。

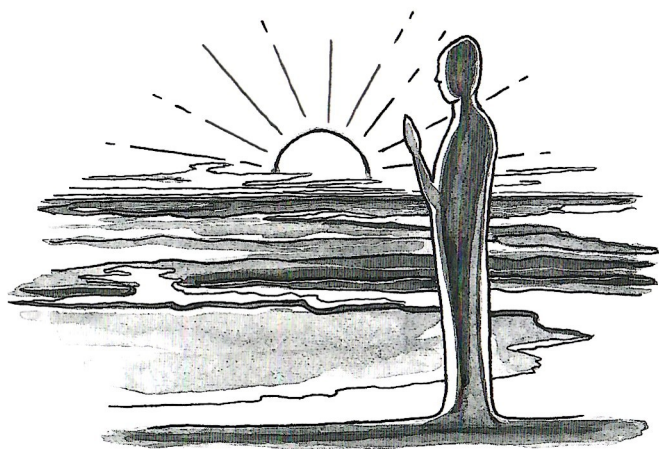
「私が目は見えなくとも仕方がないけれども、それで周りの人に迷惑をかけます。私の目が見えないために周りの人を困らせないように日朝上人に眼の回復を祈願したのです。もし、私が自分のためだけに祈ったならば、私の視力は回復しなかったでしょう。」と内川さんは私に話してくれました。

お題目の功德は敬虔な唱題修行の結果としてもたらされるのです。お題目を唱えましょう。

(編者註)

日朝上人(1442—1500)は1462年に身延山第11世法主となり、37年間の在山中に寺観を一新されるとともに、祥月や年回の法要の制度を整えられ、また、法華経や日蓮聖人の教えに対する多くの論文を書かれました。晩年は視力が衰え、日蓮聖人に視力回復の祈願をされました。上人はその祈りの中で、もし視力が回復するならば、目の病気で苦しんでいる人々のためにできる限りのことをいたしますと誓いました。そうして上人は視力を回復したのです。

V
Bodhisattva Practice
菩薩道



V 菩薩道

私たちがお題目を唱えるとき、お題目を唱えるのは自分のためではなく、人の利益のためであることをはっきりと知るべきです。

法華經の修行は菩薩行です。大乘の修行です。

大乘（大きな乗り物）とは一人のための乗り物ではありません。それは出来るだけ多くの人を載せ悟りの世界、即ち成仏の世界へ進む乗り物です。

たくさんの人が集まると考え方の違いや、諸々の理由でいつしか争いが起こります。

他人に席を譲るなど、人々のことをよく考え行動したいものです。このような行動こそ菩薩道の修行であり、相手の立場や状況を考えた行動です。

六人の子供

1950年に私が厳しい100日間の荒行に入る前のことでした。農家の主婦である、渡辺イノさんが病気で倒れました。

夫婦には6人の小さな子供がいました。ご主人の渡辺仙治さんはお寺を訪ね、畑の仕事をしながら子供の世話をす

るのはとても大変だとこぼします。

私にはこの夫婦に何をしてあげたらよいのかわかりませんでした。荒行で修行し、このような事柄について学ぶ前でしたから、お経のどの箇所を読んで奥さんの闘病平癒を祈願すべきなのかまったく見当がつかなかったのです。

それでも、私は決心して「このお経は世界でも最も優れた薬であり、もし誰かが病気になったとしても、この経を聞けば、その病は一瞬のうちに消滅し、年を取らず、不死の境地を得る」(法華經二十三章、藥王菩薩本事品)という法華經の一節をくりかえし読み、一緒にお唱題を修行をしました。

奥さんの病気は元気になりました。

数年後、その農夫は亡くなりました。私が通夜にうかがったとき、孫の宣子ちゃんがすっかり沈んでいました。

私は彼女を励まそうと思い、「おじいさんはとてもやさしい人だったね」と声をかけました。

すると彼女は「おじいさんはこの春、私に赤い車を買ってくれ、その上毎朝、毎晩、私が事故に遭わないようにとお題目を唱え、お祈りをしてくれました。」と答えました。そういう彼女の目は涙で溢れていました。

信心深い信徒

このように、このお百姓さんは若いときは奥さんのために、そして、年老いてからはお孫さんのためにお題目を唱えたのです。彼は私の寺の唱題修行の会のとても熱心な会員でした。

私は小学校4年生のとき、赤痢で死にかけました。おしりに食塩注射をされました。最初の注射は覚えていましたが、2本目のときはほとんど意識を失っていました。

私が助かるとは誰も思いませんでした。だれもが高熱が致命的であると思っていたのです。両親は私に病院よりも自宅で息を引き取らせたいと考えました。成人してから聞かされたことですが、祖母は私のために「孫を助けてもらえるなら、私の命を差し上げます」とお祈りしたそうです。

私の病が癒えて数カ月後、祖母は私の目の前で亡くなりました。

人のために祈ることは清い行いです。

VI To Expiate Sins

罪を滅す



VI 罪を滅す

私たちがお題目を唱えることは、自分自身の罪を消滅することです。

荒行に入行している僧侶は日本の最も寒い季節に100日間を通して1日に7回水をかぶります。

水行は朝3時に始まり、その日最後の7回目の水行は夜11時に行われます。

凍てつくような冷たい風にさらされながら僧侶たちは「私の罪を消滅したまえ」と大声で唱え、頭から桶いっぱいの水を何杯もかぶります。

風が冷たければ冷たいほど、罪障消滅のための行に参加していることを強く自覚します。しかしまた、修行僧たちは冷水を頭からかぶり、寒風の中でこんな厳しい行をしなければならぬほど何を悪いことをしたのだろうかとしばしば自問します。そして、「志願してこの修行に参加した以上逃げ出すことはできない」と自身に言い聞かせるのです。

大きな間違い

私たちはたとえ自分が気づかず、また、法廷で裁かれなくても、日常の生活の中でいくつも大きな間違いを犯しているものです。

例えば、私たちの心は貪り、怒、不平といった邪惡な気持や考えに満ちています。このような邪惡な感情や思考は他人を傷つけます。

また、私たちは他の生き物の命を奪っていることに気付かなければなりません。なぜなら私たちは生きているからです。都会では蟻を見つけることもまれであります。このことは多くの生き物を殺しているという証明でもあります。

お題目を唱える人は長寿だといわれます。それは、お題目の力で心を浄化しているからです。

汚い水を飲めば私達は体をこわすでしょう。私たちにはきれいな水を必要とします。

法華經の一節「不染世間法 如蓮華在水（蓮の花が泥水の上に花を咲かせるように、世間の悪い行いに染まってはいけない。）」

小野由恵夫人

私が住職をするお寺のかいきだんのつ開基檀越を開創したお檀家に嫁いだ小野由恵夫人は96歳で亡くなる直前まで、とても元気に暮らしていました。

彼女の父の一族は、かつてはお城の敷地までも所有する大地主でした。しかし、その家運は没落し、彼女の父親の代にはわずかにお城の西の隅にある処刑場の跡地を所有するのみとなっていました。

父親は先祖の供養のためにとその敷地に小さなお寺を建て、そこで修行を始めました。彼はこのお寺を一人の僧の導の下に建立したのです。

その僧は、彼女の父親からどのように先祖の罪障を償うことができるか訊ねられたとき、お寺を建てるように奨めたのです。

また、その僧は、お寺ができれば彼女の父親やその家族がそこで修行できるだけでなく、近所に住む多くの人がお寺を訪れ、仏様の教えを受けることができると、指導しました。

娘である小野由恵さんは、先祖の罪を子孫には残すまいと、熱心にお題目修行に励まれました。

仏性

お題目を唱えたと、罪を消滅させるだけでなく、仏様の力が働いて、私たち一人一人が持っている仏性の芽が大きく育ち、悪い行いをストップさせます。

また、物事を善意に解釈し、自分を反省するようになるのです。このような心の変化は朝日に露が消えるようにごく自然に起こります。

(編者註)

大荒行（厳しい禁欲的な修行）は千葉縣市川市の法華経寺において毎年11月1日より2月10日までの100日間行われ、毎年約150人の僧侶が修行に参加します。

VII

To Chant *Odaimoku* Repeatedly

お題目を繰り返し唱える



VII

お題目を繰り返し唱える

「南無妙法蓮華經」と繰り返し唱えると、真のお題目が生まれます。

「いくら数多くお題目を唱えても、心から唱えたお題目でなければ何の役にも立たない。」「繰り返し、繰り返しお題目を唱えたとして、利益はない。」「例え3遍のお題目でも心から唱えることが大事だ。」などとよくいわれます。

このように、繰り返し唱えるお題目の功德を否定する意見もあります。はたしてそうでしょうか。私はそうは思いません。

実践の繰り返し

反覆練習はよい結果を生みます。スポーツの世界では常識です。学問や芸術、その他すべての分野でも何度もアタックしてより高い水準に到達することができるのです。このことはまた「すばらしい法」、「妙法蓮華經」の「妙法」においてもいえることです。

およそ200名の人たちが拙寺の「無量唱題修行」に参加しています。その中のおひとはすでにお題目を800万遍以上唱えています。

16年以上

この修行は1980年の1月1日に始まり、16年続いています。ということはこの人は毎日1500回遍余りのお題目を唱えている勘定になります。ほかに3人の方が700万遍に近づいています。

お寺では毎朝、お題目を300遍、夕方に500遍唱えます。この日々の修行のほかに、会員は月に4回「1000遍お題目修行」のために集まります。今までにお題目を800万遍唱えた会員の方はこの会を一度も休んだことはありません。ですから、この方は毎日自宅で七百数十遍のお題目を唱えているはずです。

30分で100唱

私は皆さんに約5分間で100遍のお題目を唱えるようおすすめしています。ですから、お題目を700遍唱えるのに30分あまりかかります。30分の修行でしたら続けるのも困難なことではありません。しかしながら、この修行を十数年間も休むことなく、まるで川の流れるように続けることは稀なことであります。

最多数のお題目を唱えている方は、80歳をすぎています。昼間は畑に出て野良仕事をし、夕方に疲れると家へ帰りま

す。

「あなたは、本当にたくさんお題目をお唱えし、皆さんのお手本です。」これは10,000遍の唱題を達成するたびに私が証書を手渡すときに贈る賛辞の言葉です。

本当のことをいえば、彼はこれよりもっと多くのお題目を唱えています。なぜならば畑で仕事をしている間も、道を歩いているときもお題目を途切れることなく唱えているからです。

無限

お題目を唱えるのにこれでいいという数はありません。お題目をこんなにもたくさん唱えたので、お題目を唱える修行を完成したなどということはとてもいえません。

私たちは空気の中で生活し、絶えず空気を吸ったりはいたりしているのに空気の存在を意識していません。1日中、絶え間ないお題目、なんとすばらしいことでしょう。

VIII

Let Us Cover the Earth With *Odaimoku*

地球を包もうお題目で



VIII

地球を包もう、お題目で

私たちがお題目を唱えることは、仏様の慈悲をいただくことです。「慈悲の心をもって身を修めれば善く、仏の智慧の世界へ入ることができる」と法華經に説かれています。私はこのお経を座右の銘としています。

仏の智慧

仏様の智慧は私たちが学校で習ったり、本を読んで学ぶ知識ではありません。仏様の智慧は私たちに真実の生き方を教えてくれます。俗にお年寄りには知恵袋といわれています。それは長い年月の人生経験は、たとえ理論的でなくても真実の生き方を示しているからです。

この「お題目の意義と功德」のシリーズも第八回目、最終回になりました。これらの話しは長年唱題修行を続けている人々から学んだ教訓です。それぞれの回で学んだことをもう一度見直してみましょう。

お題目を唱えることは、

- 1、宇宙の真理にしたがって生きることです。
- 2、人として生まれ変わり、人間らしく人生を送ることです。
- 3、親への孝行に努めることです。
- 4、現証のご利益をいただくことが出来ます。
- 5、自身のためだけでなく、人のためにお祈りをする
ことです。
- 6、自身の罪を消滅することです。
- 7、繰り返し唱え、真のお題目の意味を理解すること
です。
- 8、仏の慈悲と智慧をいただくことです。

限りのない徳

お題目による徳は上に挙げただけではありません。無量のお題目を唱えれば、無量の功德、利益を私たちはいただくことが出来ます。

前にもお話ししましたように、お題目の功德や利益は願うものではないのです。お題目を唱えて、修行を続けているうちに自然に功德をいただき、さらに、人生で大事が起きたときに初めて、その功德が真に偉大なることがわかるのです。

私たちはしばしば仏様や諸天善神に「大難が小難に、小難は無難に」と祈ります。しかし、たとえこのように唱えなくとも、お題目を唱え続けていればその通りになるのです。

仏様に身をまかせ

このように信じ、唱題修行に集中すれば、いつも仏様に身をまかせるようになり、自分の心と人々の心を浄化することができます。

そして、お題目が世界中に弘まった時、清らかな地球となり、世界の平和が実現されるのです。

日蓮聖人略年表

年	月日	年齢	事 跡
1222	2月16日		千葉県小湊に生まれる。
1233	5月12日	11	清澄寺に入る。
1237		15	道善房を師とし出家する。蓮長という名を与えられる。
1238		16	鎌倉にて念仏および禅を研究する。
1242		20	延暦寺（天台宗、滋賀県比叡山）に学ぶ。
1253	4月28日	31	立教開宗。お題目を唱え、法華經の弘通を開始する。 念仏に対して否定的な聖人の教えは受け入れられず、 清澄山を追われる。鎌倉へ。 日昭入門
1254		32	日朗入門。
1258		36	実相寺（静岡県）にて一切經を閲読す。
1259		37	日興入門。
1260		38	「立正安国論」を著し、幕府の要人に奏進す。
	8月27日		松葉谷の法難
1261		39	伊東へ流罪。
1263	2月22日	41	伊東流罪放免。 日持入門
1264	11月11日	42	千葉県東条にて、小松原法難に遭う。
1271	9月12日	49	龍の口法難。
	11月28日		佐渡へ流罪となる。
1272	2月	50	「開目鈔」を著す。
1273	4月	51	「観心本尊抄」を著す。 最初の曼荼羅ご本尊を図顕する。
1274	2月	52	佐渡流罪放免。
	3月		鎌倉へ帰る。
	5月17日		身延山へ向かう。
1275		53	「撰時抄」を著す。
1276		54	「報恩抄」を著す。
1282	9月 8日	60	病氣療養のため身延山を離れる。
	9月18日		東京都池上の池上宗仲邸に入る。
	10月13日		ご入滅
1283	5月		身延山ご廟所にご聖骨を奉安する。

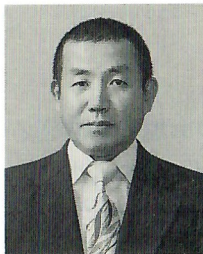
あとがき

「人生に於て非常な困難に直面したとき、お題目を唱えるとその功德は実に大きなものである。」九州の法華寺のご住職菊池泰瑞上人はこの確信において比類がありません。上人はこの信念にたって、自身もお題目を唱え、人々にも奨めています。

このことが、私が上人に「お題目の意義と功德」というテーマで日蓮宗宗務院と日蓮宗海外布教後援会の共同出版である「日蓮宗ニュース」にシリーズの記事を書いていただくことをお願いした理由です。シリーズは隔月発行のこの新聞に1993年2月号より、1994年6月号まで8回にわたり掲載されました。

原文は日本語で書かれ、私が訳し、堀教通上人に英文の校閲をたまわりました。また、及川玄一上人はこのシリーズをこの小冊子にまとめる編集を担当しました。

文責 島 啓隆



Rev. Taizui Kikuchi

Resident Minister of the Hokkeji Temple,
Oita Prefecture, Japan

Graduate of Rissho University

Bishop of Oita Prefecture

Bishop of Kyushu District

President of the Nichiren Shu Newspaper Co.

Currently, Director of the Nichiren Shu
Newspaper Co.

菊池泰瑞師略歴

大分県豊後高田市

日蓮宗法華寺 住職

立正大学卒

大分県宗務所長

九州教区長

日蓮宗新聞社 社長

現在、同社取締役

Odaimoku

お題目の功德と意義

発行日	平成八年三月廿四日
発行者	日蓮宗海外布教後援会
	〒160 東京都新宿区西新宿 7-12-5 常圓寺内
	電話 03-3371-1797 FAX 03-3371-1775
イラストレーション	岩野 希久子
編集・レイアウト	有限会社 モルト
印刷・製本	有限会社 宮野印刷

©日蓮宗海外布教後援会 Printed in Japan, 1996